

## I. 本報告の課題

### 1. イギリス帝国主義の「<sup>キャラクター</sup>性格」論

(1) 18世紀末以降のイギリス人は、道徳的優越意識に基づいて、<sup>オリエン</sup>東洋・アフリカに対する帝国主義的支配を正当化。

エドワード・サイード『オリエンタリズム』<sup>1</sup>

{ イギリス … 「勤勉」・「自由主義的」・「規律的」・「大人」  
<sup>オリエン</sup>東洋・アフリカ … 「停滞的」・「専制的」・「墮落的」・「子供」

(2) 最近、P・J・ケインがイギリス帝国主義者の言説に表れた帝国主義的「<sup>キャラクター</sup>性格」を分析<sup>2</sup>。

①19世紀イギリス帝国の特徴を、ジェイムズ・ミル、T・B・マコーリー、J・S・ミルらの言説に表れた自由主義的帝国主義 (Liberal Imperialism) と捉える<sup>3</sup>。

②イギリスのジェントルマン・エリートが自由主義的政策転換をする上で福音主義が重要な役割を果たしたと主張<sup>4</sup>。

(3) 本報告では、まず、この道徳的優越意識をイギリス人に対してもたらした宗教的基盤としての福音主義を明らかにし、次にイギリスの自由主義的帝国主義とのヴィジョンとの関係を考察する。具体的には、アフリカと太平洋諸島における奴隷貿易 (武器=労働力交易) 規制、そしてインドにおける感情的紐帯の創出の試みを取り上げたい。

## II. 「福音主義」とは何か

1. 1730年以降のイギリスとアメリカで展開された「福音復興運動 (Evangelical Revival)」(いわゆる「大覚醒運動」)以後に拡大した禁欲的プロテスタンティズム。<sup>ハイ・チャーチ</sup>高教会主義 (ウィリアム・ロード、オックスフォード運動) や<sup>プロド・チャーチ</sup>広教会主義 (ラティテューディナリアン、ケンブリッジ・プラトニスト) とは異なり、オックスフォード大学やケンブリッジ大学を中心に形成された「ジェントルマン・イデアール」<sup>5</sup>とも対照的。

2. 予定説を強調する<sup>ハイ</sup>高度カルヴィニズムとは区別される<sup>ロー</sup>穏健的カルヴィニズムとアルミニウス主義。神の恩恵の普遍性と人間の「自由意思」を強調。神の恩恵は普遍的に与えられており、会衆は、自分自身の運命に責任を持ち、「信じる義務 duty faith」を持つ<sup>6</sup>。

<sup>1</sup> Edward W. Said, *Orientalism* (London, Penguin Books: 2003; First published 1978). (エドワード・W・サイード『オリエンタリズム (上)・(下)』平凡社、1993年。)

<sup>2</sup> P. J. Cain, 'Character, "Ordered Liberty", and the Mission to Civilise: British Moral Justification of Empire, 1870-1914', *Journal of Imperial and Commonwealth History* (以下、*JICH*) 40: 4 (2012), pp. 557-578; P. J. Cain, 'Empire and the Language of Character and Virtue in Later Victorian and Edwardian Britain', *Modern Intellectual History* 4: 2 (2007), pp. 249-273; P. J. Cain, 'Character and Imperialism: The British Financial Administration of Egypt, 1878-1914', *JICH* 34: 2 (2006), pp. 177-200.

<sup>3</sup> 「自由主義的帝国主義」はもともと19世紀末にイギリス自由党のローズベリーが保守統一党の帝国主義政策に対抗するために考案した概念だったが、最近の研究では18世紀末以降のイギリス帝国主義を総称する概念として使われている。自由主義的帝国主義に関する邦語文献としては、竹内幸雄『自由主義とイギリス帝国—スミスの時代からイラク戦争まで—』ミネルヴァ書房、2011年を参照されたい。

<sup>4</sup> P. J. Cain and A. G. Hopkins, *British Imperialism 1688-2015* (3<sup>rd</sup> edn., Abingdon, Oxon, and New York, 2016), pp. 6-7, 11.

<sup>5</sup> 「ジェントルマン・イデアール」については、越智武臣『近代英国の起源』ミネルヴァ書房、1966年、第三章を参照。

<sup>6</sup> 穏健的カルヴィニズムとアルミニウス主義の違いの少なさを強調した邦語文献としては、大西晴樹『イギリス

### 3. イギリス近代的宣教運動の展開（1790年以降）：「全ての人に『信じる機会』を」

バプティスト伝道協会（1792年）、ロンドン伝道協会（1795年）、エディンバラ・グラスゴー伝道協会（1796年）、アフリカ東洋伝道協会（後の英国教会派伝道協会、1799年）、メソヂスト伝道協会（1813年）、中国奥地伝道団（1865年）やスーダン伝道団（1890年）などの「信仰宣教団（faith missions）」。

### 4. 福音主義の特徴：心を変える

〔資料1〕①回心主義、②十字架中心主義、③聖書中心主義、④行為主義<sup>7</sup>

⇒キリストの贖罪死（Atonement）と良心の呵責を強調。

（1）ジョナサン・エドワーズ（穏健的カルヴィニズムの祖、‘The Grandfather of modern Protestant missions’<sup>8</sup>）

〔資料2〕『怒れる神の御手の中にある罪人 説教 申命記 32章 35節』（「エンフィールド説教」、1741年）<sup>9</sup>

「人が蜘蛛や気味悪い虫を火の上で掴むのと殆ど同様に、地獄の上であなた〔会衆〕を握っておられる神はあなたを忌み嫌い、激昂しておられます。あなたへの怒りは火の如く燃えているのです。神はあなたを、火の中に投げ込む価値しかないと見なしておられるのです。…あなたは、手に負えない反逆者がその君主に対してしたのとは比較にならぬほど激しく神を怒らせてしまったのです。」

「イザヤ書六三章三節の偉大な神の次の御言葉は、何と恐ろしいことでしょうか。『わたし〔神〕は怒って彼ら〔会衆〕を踏み、／憤って彼らを踏みにじった。／それで、彼らの血のしたたりが、／わたしの衣にふりかかり、わたしの着物をすっかり汚してしまった。』」

⇒説教を聞いた会衆の間に懺悔の苦闘（うめき、叫び、涙、痙攣）が生じ、回心へ導かれる。

（2）ジョン・ウェスリー（アルミニウス主義）の説教時も懺悔の苦闘が生じた⇒回心だけではなく、聖化（キリスト者の完全）も求めたため。

〔資料3〕善き行為 ⇒「説教 金銭の使い方」<sup>10</sup>（マックス・ヴェーバーも強調しているが）

①「できるだけ利益を得よ」（Gain all you can）、②「できるだけ節約せよ」（Save all you can）、

③「できるだけあたえよ」（Give all you can）

（3）こうした福音主義的イデオロギーは労働者の規律化・生産力化・道徳的抑制を推進

⇒「道徳機構（moral machinery）」の強調。

〔資料4〕E・P・トムスン『イングランド労働者階級の形成』（第11章「十字架の変形力」）

アンドリュー・ユア『製造業の哲学』からの引用<sup>11</sup>

「どの工場所有者にとっても、比類のない関心事は、機械の場合と同じくらい強固な原理にもとづいて道徳機構（moral machinery）を編成することにある。そうしなければ、工場所有者は、すぐれた生産物に欠かさない、確かな手の動きや、注意深いまなざしや、素早い協力などを支配しえないのだから。…実際、福音書

---

革命のセクト運動 増補改訂版』御茶の水書房、2000年；山田園子『イギリス革命の宗教思想 ジョン・グッドウィン研究』御茶の水書房、1994年；山田園子『イギリス革命とアルミニウス主義』聖学院大学出版会、1997年を参照。

<sup>7</sup> David W. Bebbington, *Evangelicalism in Modern Britain: A History from the 1730s to the 1980s* (London, 1989), pp. 2-3.

<sup>8</sup> Ronald E. Davies, 'Jonathan Edwards and His Influence on the Development of the Missionary Movement from Britain', *NAMP (North Atlantic Missiology Project) Position Paper 6* (Cambridge, 1996), p. 2.

<sup>9</sup> ジョナサン・エドワーズ（飯島徹訳）『怒れる神の御手の中にある罪人 説教 申命記 32章 35節』CLC出版、1991年、24～25頁、31頁；Edwards, Jonathan. *Sinners in the Hands of an Angry God: A Sermon preached [from Deut, 32: 35] at Enfield, July 8, 1741* (Boston, 1741), pp. 15, 19.

<sup>10</sup> ジョン・ウェスレー（大宮溥訳）「説教 金銭の使い方」、『現代キリスト教思想叢書4 ウェスレー キリスト者の完全 説教三篇 フォーサイス キリストの働き』白水社、1974年、182頁、188頁、192頁；Edward H. Sugden, (ed.) *Wesley's Standard Sermons*, vol. 2 (London, 1921), pp. 314, 320, 324.

<sup>11</sup> エドワード・P・トムスン（市橋秀夫・芳賀健一訳）『イングランド労働者階級の形成』青弓社、2003年、430～431頁（訳文は竹内真人が修正）；Andrew Ure, *The Philosophy of Manufactures: or, an Exposition of the Scientific, Moral, and Commercial Economy of the Factory System of Great Britain* (London, third edition: 1861), pp. 417, 424-5.

の教え「敬虔は有益なり」は、ほかのどこよりも、広い工場の管理に適応できるものなのである。」

「では、人間はこの変貌させる力をどこに見いだすのだろうか。キリストの十字架に、である。それはおかしき罪を取り除くいけにえであり、罪への愛着を取り除く動因である。それは、卑劣な行為があのような恐ろしい償いによってしか洗い流せないことを示して、そうした行為を克服する。それは不服従を償う。それは服従へとかりたてる。それは服従する力を獲得する。それは服従を実行しうるものにする。それは服従を受け入れられるものにする。それは服従を強いるのであり、服従をある種避けえないものにする。最後に、それは服従への動因であるばかりでなく、服従の手本である。」

[資料5]「キリスト教・文明化・商業」の関係に関するウィリアム・エリスの言説（1837年頃）<sup>12</sup>（南洋諸島へのロンドン伝道協会宣教師、福音主義者）

‘Christianity furnishes a complete moral machinery for carrying forward all the great processes which lie at the root of civilization.’

‘Christianity...secures protection to the merchant and the mariner, and the greatest facilities for the extension of commerce. Traffic can often only be carried on with uncivilized tribes at great risk, even of personal safety; but where missionaries have introduced the gospel, our vessels go with safety and confidence.’

(4) イギリスによる奴隷貿易廃止（1807年）、イギリス帝国内の奴隷制廃止（1834年）

自他国の「不正な交易活動（traffic）」を規制し、「合法的商業（legitimate commerce）」を推進。

（例）デイヴィッド・リヴィングストン…「キリスト教、文明化、そして商業」

(5) 先住民の「保護」：特別委員会報告書（1837年）<sup>13</sup>、トマス・ホジキンによる先住民保護協会（Aborigines’ Protection Society）の設立（1837年）、ジョセフ・スタージによる反奴隷制協会（British and Foreign Anti-Slavery Society）の設立（1839年）

◎ホジキンもスタージも福音主義者（クエーカー派）。

### Ⅲ. 武器＝労働力交易の展開

#### 1. アフリカにおける武器＝労働力交易の展開<sup>14</sup>

- (1) 大西洋奴隷貿易（1672年から）：「銃と奴隷の交換関係」<sup>15</sup>、すなわち武器＝労働力交易によって、大量の燧発式マスケット銃（前装滑腔銃）が西アフリカに拡散。
- (2) 南アフリカ銃貿易（1870年代から）：前装銃から後装銃への技術革新の結果、不要となった旧式の撃発式後装施条銃（スナイダー・エンフィールド銃等）が大量に廃棄処分され拡散。南アフリカ共和国からその近隣部族に、ポルトガル領モザンビークのデラゴア湾からズールランドに拡散した。西グリカランド（キンバリー）のダイヤモンド鉱山での武器＝労働力交易でも拡散。
- (3) 東アフリカ奴隷貿易（1770年代から）：マスカットからザンジバルに銃・弾薬を輸出し、ザンジバルで中央アフリカから移送された奴隷・象牙を獲得する。そして中東・インドに奴隷・象牙を輸出するという構造。オマーンのアラブ商人やインド商人によって行われた。特に1870年代以降になると、撃発式後装施条銃（スナイダー・エンフィールド銃等）が拡散。

<sup>12</sup> Statement of Rev. William Ellis, in D. Coates, J. Beecham, and W. Ellis, *Christianity the means of civilization: shown in the evidence given before a committee of the house of commons, aboligines* (London, 1837), pp. 175, 183.

<sup>13</sup> *Report from the Select Committee on Aborigines (British Settlements), British Parliamentary Papers* (1837), VII [425].

<sup>14</sup> 竹内真人「アフリカ銃貿易とブリュッセル会議（1889～90年）—ソールズベリー首相はなぜ銃貿易規制を推進したのか—」榎本珠良編著『国際政治史における軍縮と軍備管理—19世紀から現代まで—』日本経済評論社、2017年、40～48頁。

<sup>15</sup> J. E. Inikori, *Africans and the Industrial Revolution in England: A Study in International Trade and Economic Development* (Cambridge, 2002), pp. 383.

[資料6] ザンジバルのイギリス総領事 Euan-Smith からソールズベリー首相への書簡 (1888年6月28日): 「東アフリカでの武器弾薬の輸入は、きわめて深刻な問題となっております。…これまでに輸入された武器は、安物で、長くても二、三年しか使用に耐えられない粗悪品でした。ところが今日では、精巧な武器 [雷管銃や連発銃] や後装施条銃とその弾薬がきわめて大量に輸入されており、燧発式で前装の安物のマスケット銃は、急速にそれに置き換えられております。…東アフリカへのこうした止めどもない武器の輸入を規制する何らかの措置が講じられないならば、この巨大な大陸の開発と統治は、大半が一流の後装施条銃で武装した膨大な人口と対峙するなかで、行わねばならなくなります。」<sup>16</sup>

## 2. 南西太平洋諸島 (メラネシアとミクロネシア) における武器=労働力交易の展開 (1860年代から)<sup>17</sup>

- (1) 銃と交換に約8万9500人の南西太平洋諸島民がオーストラリアのクイーンズランドとフィジーの砂糖プランテーションに移送された。
- (2) 特に1870年代以降には、大量の撃発式後装施条銃 (スナイダー・エンフィールド銃等) が南西太平洋諸島に拡散。

## IV. イギリスによる武器=労働力交易規制

### 1. 福音主義派の宣教団体と人道主義団体による規制要求

### 2. 南西太平洋諸島の武器=労働力交易に対する規制<sup>18</sup>

- (1) 英国教会派メラネシアン・ミッションの J・C・パティソン主教が島民によって殺害された事件を契機に太平洋諸島民保護法 (1872年) が成立。しかし、イギリス人以外の武器=労働力交易者を規制できず。
- (2) 太平洋での武器供給禁止国際協定の試み: スコットランド長老派の宣教師ジョン・ペイトンのアメリカ合衆国とカナダでの国際キャンペーンにもかかわらず、実現せず。

### 3. アフリカの武器=労働力交易に対する法規制<sup>19</sup>

- (1) ブリュッセル会議 (1889~90年): アフリカの武器=労働力交易規制が歴史上初めて多国間で協議された会議。先住民保護協会が銃貿易規制を要求。ソールズベリー首相は当初規制に消極的。
- (2) 先住民保護協会員 Francis W. Fox (クエーカー派実業家) のブリュッセルでのロビー活動 (1889年11月)。
- (3) バーミンガム カウンシル・ハウス 議事堂でアフリカ武器貿易規制を求める集会 (1890年1月10日、議長バーミンガム市長)
- (4) アフリカ武器貿易規制を要求するロンドン市長公邸 (Mansion House) での集会 (1890年1月29日): シティ大物銀行家 Robert Nicholas Fowler 准男爵の参加。福音主義者とシティとの協力関係が見られる。
- (5) 一連の人道主義的活動の結果、アフリカ武器貿易規制を求める人道主義的世論は高揚し、ソールズベリー首相はブリュッセル会議での武器貿易規制に賛成 (1890年2月8日)。

### 4. しかし、武器=労働力交易規制の実効性は低い。

- (1) 南西太平洋諸島では、武器供給禁止国際協定の締結は実現せず。仏独も規制に消極的。
- (2) アフリカの銃貿易の拠点は、東アフリカから、紅海の入口にある仏領ソマリランドのジブチと、アラビア半島東端のマスカットに移動 (そこから、エチオピアのメネリク二世や東アフリカに流入)<sup>20</sup>。

<sup>16</sup> Euan-Smith to Salisbury, 28 June 1888, FO881/5732/52, pp. 28-29. 訳文は、横井勝彦『大英帝国の<死の商人>』講談社、1997年、74頁による。

<sup>17</sup> 竹内真人「イギリス帝国主義と武器=労働交易」横井勝彦・小野塚知二編著『軍拡と武器移転の世界史—兵器はなぜ容易に広まったのか—』日本経済評論社、2012年、78~80頁。

<sup>18</sup> 竹内「イギリス帝国主義と武器=労働交易」、83~96頁。

<sup>19</sup> 竹内「アフリカ銃貿易とブリュッセル会議」、39~40頁、48~61頁。

<sup>20</sup> Emrys Chew, *Arming the Periphery: The Arms Trade in the Indian Ocean during the Age of Global Empire* (Basingstoke, 2012), pp. 113-116.

## V. 福音主義者によるインドでの感情的紐帯創出の試み

### 1. チャールズ・グラント (Charles Grant, 1746~1823 年)

(1) クラバム派の福音主義者、ウィリアム・ウィルバーフォースの友人、東インド会社の<sup>チェアマン</sup>会長・<sup>ディレクター</sup>役員 (政治家)。インドでの宣教運動とインド人に対する教育を推進。

(2) 『グレートブリテンのアジア臣民の社会状態に関する観察』(1792 年)<sup>21</sup>

#### ① 執筆の動機<sup>22</sup>

- ① イギリスがインドから継続して利益を得るためには、インド人に「良き統治」を教える必要がある。
- ② キリスト教共同体の一部である東インド会社は、その統治下にある大衆の「福利」増進の義務を持つ。

② その内容：英語教育とキリスト教の布教による「感情的紐帯」の創出

[資料 7] ‘The first communication [with the Hindus]...must be the English language’.<sup>23</sup>

[資料 8] ‘undoubtedly the most important communication which the Hindoos [Hindus] could receive through the medium of our language, would be the knowledge of our religion [i.e., Protestantism]...Wherever this knowledge should be received, idolatry...would fall.’<sup>24</sup>

[資料 9] ‘The true cure of darkness, is the introduction of light.’<sup>25</sup>

[資料 10] ‘a principle of *assimilation*, a *common-bond* [is the leading idea]...Without an uniting principle...we can suppose the country to be...retained only by mere power; but in the same degree that an identity of sentiments and principles would be established, we should exhibit a sight new in the region of Hindostan [India], a people actively attached, cordially affected to their government, and thus augmenting its strength.’<sup>26</sup> (下線は竹内、以下同様)

[資料 11] ‘This is the noblest species of conquest; and wherever...our principles and language are introduced, our commerce will follow.’<sup>27</sup>

### 2. T・B・マコーリー (Thomas Babington Macaulay, 1800~1859 年)

(1) 中産階級の商人の家で生まれ、クラバム派のなかで育てられた歴史家・詩人・ウィッグ党政治家<sup>28</sup>

(2) 「インド人の教育に関する覚書」(1835 年)<sup>29</sup>

[資料 12] ‘the dialects commonly spoken among the natives of this part of India, contain neither literary nor scientific information, and are, moreover, so poor and rude...a single shelf of a good European library was worth the whole native literature of India and Arabia.’<sup>30</sup>

[資料 13] ‘In India, English is the language spoken by the ruling class. It is spoken by the higher class of natives at the seats of Government. It is likely to become the language of commerce throughout the seas of the East. It is the language of two great European communities which are rising, the one in the south of Africa, the other in Australasia;

<sup>21</sup> Charles Grant, *Observations on the State of Society among the Asiatic Subjects of Great Britain, particularly with respect to morals; and on the means of improving it.* – Written chiefly in the year 1792, *British Parliamentary Papers* (1812-13), X (282).

<sup>22</sup> Ainslie Thomas Embree, *Charles Grant and British Rule in India* (London, 1962), p. 143.

<sup>23</sup> Grant, *Observations*, p. 77.

<sup>24</sup> *Ibid.*, pp. 79-80.

<sup>25</sup> *Ibid.*, p. 76.

<sup>26</sup> *Ibid.*, p. 104.

<sup>27</sup> *Ibid.*, p. 112.

<sup>28</sup> G. Otto Trevelyan, *The Life and Letters of Lord Macaulay*, 2 vols. (New York, 1876), vol. I, p. 119, vol. II, pp. 55, 83.

最近のマコーリーの伝記的研究として、Zareer Masani, *Macaulay: Britain's Liberal Imperialist* (London, 2013) も参照。

<sup>29</sup> Thomas Babington Macaulay, ‘Minute on Indian Education’, 2 Feb 1835, in *Macaulay: Prose and Poetry, selected by G. M. Young* (Cambridge, Massachusetts, 1970), pp. 719-730.

<sup>30</sup> *Ibid.*, pp. 721-722.

communities which are every year becoming more important, and more closely connected with our Indian empire...the English tongue is that which would be the most useful to our native subjects.<sup>31</sup>

[資料 14] ‘English is better worth knowing than Sanscrit or Arabic... We must at present do our best to form... a class of persons, Indian in blood and colour, but English in taste, in opinions, in morals, and in intellect.’<sup>32</sup>

### 3. M・A・シェリング (Rev. Matthew Atmore Sherring、1826～1880 年)

(1) 福音主義派のロンドン宣教協会宣教師・教育者・宣教学者。

(2) 『大反乱時のインドの教会』(1859 年)<sup>33</sup>

[資料 15] ‘the Government disowned the native Christian. Politically, he was an outcast; he could gain admission to no office under Government... He was equally excluded from military preferment, at least in the Bengal army, except in the capacity of a drummer. He could not be accepted as a sepoy.’<sup>34</sup>

[資料 16] ‘if the loyalty and hearty co-operation of the native Christians were of such a character, how materially would the Government have been strengthened had their number been a hundred times greater than what it was! And the thought, too, presents itself with striking force, that for the natives to become evangelised is for them to be made loyal subjects of the British crown... Let the Government of India, therefore, as a matter of administrative policy, throw all the weight of its influence into the scale of missions, for by so doing it will add immensely to its own stability, and, it may be, prevent the possibility of a second rebellion.’<sup>35</sup>

### 4. J・S・ミル (John Stewart Mill、1806～1873 年) : イギリスの功利主義哲学者

(1) アダム・スミス、デイヴィッド・ヒューム、エドマンド・バークには「共感」を通じた思想の柔軟性があり他者の文化や習慣に寛容であったが、J・S・ミルの他者認識には欠陥があり、彼は尊敬すべき対象として他者を認識しなかった。その主な原因は「19 世紀英国人の性格の基盤」であった福音主義にある<sup>36</sup>。

(2) 『代議制統治論』(1861 年)

[資料 17] 「いくらかの広さと人口をもつ国外領土で、従属国として保有されるもの、すなわち支配国の立法部において平等に代表される（とにかく代表されるとして）ことなく、多かれ少なかれ支配国側の主権の行為に服従するものは、二種に分けることができる。いくつかは、支配国と類似の文明をもつ人々から成り、代議制統治の能力をもち、それにふさわしく成熟している。それはアメリカとオーストラリアにおけるイギリスの領有地のようなものである。そのほかのものは、インドのように、その状態から、まだはるかにへだたっている。まえの種類の従属諸国のばあいには、この国はついに、まれにみる完全さにおいて、統治の真の原理を実現した。イギリスは、その海外人口のうちで、イギリスの血と言語をもつような人びとに、また、そうでない若干の人びとに、イギリス自身のものをまねて形成された代議的諸制度を与えるという、ある程度の義務を負っているとつねに感じてきた。…しかし、そのほかにそうした状態にまだ到達しない諸従属国もあって、それらはとにかく領有されるとすれば、支配国によって、あるいは支配国がその目的のために派遣した人物によって、統治されなければならない。この統治様式は、従属国民の現在の文明状態において、かれらが改良における高次の段階へ移行するのをもっともよく助長する統治であるならば、他のいかなる統

<sup>31</sup> *Ibid.*, p. 723.

<sup>32</sup> *Ibid.*, p. 729.

<sup>33</sup> Rev. M. A. Sherring, *The Indian Church during the Great Rebellion* (London, 1859).

<sup>34</sup> *Ibid.*, p. 335.

<sup>35</sup> *Ibid.*, pp. 338-339.

<sup>36</sup> 竹内幸雄『自由主義とイギリス帝国』107～108 頁 ; Eric Stokes, *The English Utilitarians and India* (Oxford, 1959), pp. xii-xiv 参照。

治にも劣らず正当である。」<sup>37</sup>

5. グラッドストーン (William Ewart Gladstone, 1809～1898 年) : イギリス自由党の首相

(1) イギリスの福音主義派神学者ジョセフ・バトラー主教 (1692～1752 年) の著作に強い影響を受け、バトラーが主張した「神の道徳的統治」を実践しようとした<sup>38</sup>。

(2) グラッドストンの自由主義的帝国主義

①帝国とは「自由に成長する共同体」であり、武力によってではなく、「自由意思」に基づいて自発的な政治的結合関係を維持し、危機の際にはイギリスが防衛すべきもの。カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなどのような高度に「文明化」された植民地に対しては責任政府を与えて分離独立させるが、東洋やアフリカなどの「文明化」が遅れた地域に対しては、「文明化の使命」を強調し、遅れた民族を教え導くためのイギリス支配（「道徳的信託統治 (moral trusteeship)」）を認めた<sup>39</sup>。

②「イングランドの使命」(1878 年)

[資料 18] ‘The substance of the relationship lies, not in dispatches from Downing Street, but in the mutual affection, and the moral and social sympathies, which can only flourish between adult communities when they are on both sides free.’<sup>40</sup>

6. フランク・ルガード・ブレイン (Frank Lugard Brayne, 1882～1952 年)

(1) 福音主義者のインド高等文官、叔父は『英領熱帯アフリカの二重統治論 (*The Dual Mandate in British Tropical Africa*)』を書いたフレデリック・ルガード (Frederick Lugard)。ケンブリッジ大学のペンブルック・カレッジ卒業後、1905 年にインド高等文官になった。グルガオン農村地域の道徳改善運動 (1920～30 年代) に従事。著作には、*Socrates in an Indian Village* (Oxford, 1929) や *Better Villages* (1937; 3<sup>rd</sup> edn., Oxford, 1945) 等がある<sup>41</sup>。

(2) 「パンジャブにパブリック・スクール制度を設立する計画に関するノート及び書簡」(1925～31 年)

[資料 19] ‘Punjab public school. The education at present available for the sons of Punjab Gentlemen does not pay sufficient attention to the formation of character. If the Punjab is to rule itself it must have an abundance of men of character with a sense of duty and of responsibility, independence and impartiality of judgment, initiative, etc.... The English public school system is unique in the world in the attention it pays to the formation of character. Its principles are rigid discipline, sound moral and religious instruction, and out of school hours self-Government by the boys themselves according to an unbending code of manly traditions.’<sup>42</sup>⇒パブリック・スクールは実際には設立されず。

<sup>37</sup> J・S・ミル (水田洋訳) 『代議制統治論』岩波書店、1997 年、406～407 頁、419 頁。

<sup>38</sup> W. E. Gladstone, *Studies Subsidiary to the Works of Bishop Butler* (Oxford, 1896), pp. 1-15 参照。

<sup>39</sup> Richard Koebner and Helmut Dan Schmidt, *Imperialism: the Story and Significance of a Political Word, 1840-1960* (Cambridge, 1964), pp. 101-102, 145, 161.

<sup>40</sup> W. E. Gladstone, ‘England’s Mission’, *The Nineteenth Century*, IV (September 1878), p. 572.

<sup>41</sup> ブレイン等のインド高等文官に関する研究としては、Clive Dewey, *Anglo-Indian Attitudes: The Mind of the Indian Civil Service* (London, 1993) ; 本田毅彦 『インド植民地官僚—大英帝国のエリートたち』講談社、2001 年がある。

<sup>42</sup> Notes and correspondence about a scheme to establish a public school system in the Punjab, 1925-31, Papers of Frank Lugard Brayne, India Office Records, British Library, Mss Eur/ F 152/ 28, f. 3.

## VI. まとめ

1. ガンディーの独立運動（脱帝國的ナショナリズム）にみられる如く、インドにおける感情的紐帯の広範な創出は困難であり、イギリスはインドとの最も強い絆を欠いていた。しかしながら、イギリスは19世紀を通じて（そして20世紀初頭においても）インドにおいてイギリスとの感情的紐帯の創出を試みており、それはアフリカや南西太平洋諸島の武器＝労働力交易規制と並んで、イギリスの「文明化の使命」感に基づく道徳的プロジェクトであった。
2. イギリスの自由主義的帝国主義は福音主義に基づくものであった。